
バルト海の海賊王子

水聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バルト海の子王

【Nコード】

N99000

【作者名】

水

【あらすじ】

舞台は大航海時代のヨーロッパ。

海賊の青年と東洋の少女との恋と冒険の物語です。

ちなみに時代考証とかぶつとぼしているので、そのあたりは暖かい目で見てやってください。

舞台こそ違え、書く内容は現代ものとあまり変わりません。

歴史もの、ではなくコスチュームものの冒険ラブロマンス（な、なんか恥ずかしいなあ・・・）だと思って、気楽な気持ちで読んでください。

北の海賊・東の姫君 其の一（前書き）

20世紀初頭、人類が移動の手段として翼を手に入れるまで、人々にとって異国への入り口は海であった。

大海原は人々をまだ見ぬ世界へと誘い、憧れをかきたてた。

大航海時代、ヨーロッパは黒死の病と魔女狩りによって塗りつぶされた暗黒の中世を抜け出し、航海技術の飛躍的な発展によって、世界中の海を制そうとしていた。

ヨーロッパが勃興から繁栄へと向かう時代。

新世界へ、富と覇権を求め、欧州各国が大海原へと乗り出すなか、その富を狙う海賊たちも跋扈する。

ヨーロッパ北部、欧州大陸本土とスカンジナビア半島に囲まれた美しい内海、バルト海。

そこに一際若く美しい青年が首領を務める海賊の一団があった。

その鮮やかな手口、また人身売買や陵辱、虐殺などの非道な振る舞いは決してしないこと、そして端麗な容姿から、人々は彼のことを「東海の花賊王子」と呼んだ。

北の海賊・東の姫君 其の一

北の海賊・東の姫君 其の一

「標的だ・・・」

広い海原を見つめ、レオンは呟いた。

水平線の彼方にはまだ、何も見えない。

だが、レオンは確信していた。この海の向こうから、すごいお宝がやってくる。

未だかつてこの勘が外れたことはない。それが、このまだ年若い青年を海賊の長たらしめている所以でもある。

ほどなく、彼の言葉を裏付けるかのように、一隻の船が現れた。

「行くぞ！」

レオンの声とともに、海賊たちは、次々と標的となった船に飛び移る。うろたえ騒ぐ人々をかき分け、彼らは船倉へ向かった。

無益な殺生はしない、狙うのは積荷だけ、水や食料には手をつけない、それがレオンとその仲間たちの矜持だった。

今回は大した抵抗もなく、あっけないほど簡単に襲撃は終わった。まずまずの収獲といえるが、思ったほどではない。

勘が狂ったかな、とレオンが思っていた時。

船室から一人の少女が現れた。深紅のドレスを身に纏ったその少女に、レオンの目は釘付けになった。

（見つけた・・・）

思わず心の中で呟く。

漆黒の髪が風になびいた。しなやかなその髪が陽をあびてきらきらと輝く。今まで、数々の美女と浮名を流してきたレオンだったが、この娘はこれまで見たこともないほど魅力的だった。

この船で、いやこの世で最も美しく価値の高いもの。それはまさしくこの少女に他ならない。

レオンの心が揺れた。

略奪するのは積荷だけ、決して無抵抗の人間を傷つけたり攫ったりはしない。

決して・・・。

だが、そんな彼の心に「迷い」が生じていた。

この少女が欲しい、このまま攫って自分のものにしてしまいたい。生まれて初めてそう思った。

だが、それをすれば、これまで彼を支えてきた海賊としての誇りを捨てることになる。

そして、それは、彼を信じてついてきてくれた仲間たちを裏切ることもあった。

そんなことは絶対にできない。

けれど、どうしてもこの少女が欲しい。諦めてこの場を去ることなど到底できそうもない。

レオンは迷い、少女を見つめたまま甲板に立ち尽くしていた。

北の海賊・東の姫君 其の一（後書き）

非常に恥ずかしいです。特に序文が大仰で・・・。

でも、いきなり話をはじめるとなんのことかわからないだろうし。
ええ、タイトルもベタですよ。

でもまあ、よろしかったらまた読んでやってください。

北の海賊・東の姫君 其の二

北の海賊・東の姫君 其の二

そんな彼の逡巡など、全く知らない少女は、素早く辺りを見回すと、意を決したようにデッキの端に駆け寄った、そして。
あっと思う間もなく、少女は海に身を投げた。

「なっ・・・」

考えるより先に体が動き彼もまた、海へと飛び込んだ。このあたりの海域はレオンにとっては庭のようなものだ。潮目などはすべて体が覚えている。

レオンはすぐに少女に追いついた。落下の衝撃で気を失っている少女の腰をしっかりと抱え浮上する。

「船長、早く！」

降りてきたロープにつかまり、少女を抱えたまま甲板に上がる。さすがに息があがった。

「その娘は？」

「逃げようとして海に落ちた」

仲間の一人、エリックの問いに、レオンは咄嗟にそう言った。

「ああ・・・。でも船長、船が」

レオンが振り返ると、少女の乗っていた船はすでに遠くへ逃げさっていた。

少女の不在に気付かなかったのか、あるいは見捨てられたのか。

「さっきの船の衣装箱を俺の部屋に運んでおけ」

そう言うのとレオンは少女を抱えたまま、船室へと向かった。

部屋に入るとレオンは少女を長椅子に座らせ、軽く揺すった。すぐに気を失ったのがかえって嬉しい、ほとんど水は飲んでいないようだ。

「う・ん・ん・ん」

少女は軽い呻き声を上げるとうっすらと瞳を開いた。髪は漆黒だったが、瞳の色は淡いブラウンで、バルト海の底に眠る琥珀のように美しい。

その瞳がレオンを見つめる。胸がざわめいた。

「気がついたか？」

「なぜ助けた」

「え？」

「私を助けたところでメリットなぞないぞ。人質にとっても、父は金など払わないから、さっさと捨ててきたほうがいい」

少女は投げやりに言った。

「そんなつもりはない！」

レオンは思わず叫んでいた。何故この美しい少女が自ら海に身を投げることになったのか、その理由が知りたかった。

少女は驚いたようにレオンを見た。琥珀の瞳に、真剣な表情のレオンが写っている。

「俺は、レオン、東海のレオンだ。お前は？」

「咲耶・・・」

「さくや、珍しい名だな」

「本名ではない。本当の名はエリザベート、父の祖母の名らしい。父の家では、子の名は先祖の名の中から選んでつけるのが慣習になっている」

少女はそう答えたが、「エリザベート」という名も、「父の家」も彼女にとっては居心地のよいものではなかったのだろう。少女の表情から、レオンはそう思った。

「では、咲耶というのは？」

少女は、うつすらと微笑んだ。その表情にレオンは魅せられる。

「母がつけてくれた。母の国の名だ。」

「どこの国だ？」

「日本。世界の東の果てにあるという、美しい島だ。母はその国で攫われて奴隷に売られた。父は母の美貌に目をつけて妾にし、私が生まれた。母は私が10のときに病で死んだ。最後まで、国に帰りがっていた。」

「東の果ての島、ジパングか」

「そうだな、このあたりではそう呼ぶらしい」

話には聞いたことのある、東洋の美しい島。黄金の島、と呼ばれて

いる。この少女は、その国に所縁があるのか。

北の海賊・東の姫君 其の二（後書き）

「さくや」は「コノハナノサクヤヒメ」からもらいました。

ニギノミコトの妻で、「さくら」の語源とも言われています。

ニギのミコトがコノハナノサクヤヒメを見初め、名を聞いた（名を訊くのは求婚の意味があるとか）というのがこの話のベースになっています。

北の海賊・東の姫君 其の三

北の海賊・東の姫君 其の三

「なぜ、海に身を投げたりした？」

少女は唇を噛んだ。

「母が亡くなって、私は父に引き取られた。だが、妻の手前もあり、私は厄介者だった。それで私は嫁に出されることになった。小金を持っている領主の後妻だ」

レオンの胸がずきりと痛んだ。

「お前は、その男が好きなのか」

思わず声が尖る。

「まさか」

少女はふっと笑った。

「父より年上で、妾が6人いる。たまたまうちの屋敷に所用があつて訪ねてきたときに私を見かけて、父にその話を持ちかけたらしい。父にとっては好都合だ、すぐに話しがまとまり、豊富な支度金と引き換えにそこへ向かう途中だった。海賊の襲撃で見張りが逃げ出したので、やっと外に出られたが、私には行き場所などないと気づい

た、それで・・・」

「ここにいろ！」

少女はレオンを見上げた。不思議そうな表情だが、不愉快そうではない。

「ここにいて、俺の妻になれ」

彼女はくすつと笑った。

「酔狂な、私が欲しければ、抱けばよからう。飽きれば海に捨てるなり、どこかへ売り飛ばすなり、好きにすればいい」

「そんなことはしない！」

レオンの口調の激しさに、驚いたように少女はレオンを見上げた。

「咲耶・・・」

レオンは少女の名を呼んだ。

どこにでもありそうな「エリザベート」という名より、「咲耶」という神秘的な名のほうが、この少女に相応しい。

「私をそう呼んでくれるのか？」

少女の問いにレオンは頷く。

「エリザベートはさつき海に落ちて死んだ。ここにいるのは咲耶だ。東の果て黄金の国から来た」

レオンは咲耶の顔を両手で包み、そつと唇を重ねる。
彼女は一瞬目を見開いたが、瞳を閉じてレオンの口付けを受け入れた。

唇を離すと咲耶は潤んだ瞳でレオンを見つめていた。本能的に押し倒したくなってしまうが、レオンはその衝動に耐え、立ち上がった。

咲耶が欲しい、どうしても欲しい。だが、体だけが欲しいわけではない。それをなんとかしてわかって欲しかった。

レオンは、引き出しから何かを取り出すと、そつと咲耶の掌に乗せた。

北の海賊・東の姫君 其の三（後書き）

レオンが咲耶に渡したものは？
次回、最終回です。

北の海賊・東の姫君 其の四（前書き）

最終回です。

お付き合いありがとうございます。

北の海賊・東の姫君 其の四

北の海賊・東の姫君 其の四

「開けてみる」

彼女が掌を開くと、そこには今まで見たことのないほど見事な青玉があった。

「これは？」

「俺が今まで見つけた中で、一番、価値のある宝玉だ。青は俺の一番好きな色だ。それをお前にやる」

「どうして・・・」

咲耶が目を丸くする。その口調が柔らかくなったことに、レオンはほっとした。

「それ以上の宝を見つけたからさ」

「それ以上って？」

「鈍い奴だな、お前は」

レオンはそう言うとき咲耶を抱きしめた。

「咲耶、俺が見つけた最高の宝はお前だ。俺はお前が欲しい、心も体も、すべてが。今まで見つけたすべての財宝を引き換えにしてでも」

「レオン」

「俺の妻になれ。一緒に世界中の海を旅しよう。そしていつかお前の母の国にも行こう」

咲耶はしばらくの間、琥珀色の瞳でレオンをじっと見つめていた。レオンにとって永遠にも思える長い沈黙。ようやく咲耶が口を開いた。

「せっかくだが、これは受け取れぬ」

そう言うと咲耶は、手の中の青玉をレオンに返した。

「え・・・」

さきほどの咲耶の様子から、求婚を受け入れてくれるものだと思い込んでいたレオンは落胆した。

「では、これからどうする。父親のもとに帰りたくはなからう。そうだ、次の港に俺の信頼している宿屋のおかみがいる。そこで働くか？それとも修道院に入るか。俺の知り合いのシスターに頼んで・・・」

「私にはその青玉よりも、もっと欲しいものがある」

咲耶はレオンの言葉を遮るように言った。

「ほしいもの？俺の持っているものか」

咲耶はこくりと頷いた。

「それは何だ、お前の望むものならなんでも・・・」

咲耶のしなやかな腕が伸ばされ、その手がレオンの髪に触れた。陽の光を写し取ったような、黄金色の髪。そしてその瞳は、バルト海のような、わずかに紫を帯びた青色だった。

そうそれは、最高級の青玉、コーンフラワーブルーと同じ色。

「私が欲しいのはこちらの青玉のほうだ」

「さくや・・・」

ようやく、咲耶の意図することがレオンに伝わった。

「その青玉の瞳で、ずっと私を見ていてくれるか？」

レオンは大きく頷いた。

「ああ、もちろん。俺のすべてはお前のものだ。ただし、絶対に一生離さないから、覚悟をしておけ、いいな」

咲耶はにっこり笑った。その笑顔はレオンが今まで見てきたどんな宝よりも美しく、価値のあるものだった。

咲耶の腕がレオンの首に回され、レオンは咲耶をしっかりと抱きしめた。

交わされる口づけに永遠の愛を誓う。

今この瞬間から、

俺のすべてはお前のものだ。

決して離さない。

永遠に・・・。

E
N
D

北の海賊・東の姫君 其の四（後書き）

最後はやっぱ恥ずかしい、というw

読んでくださった方、どうもありがとうございます。

今までにないタイプの話だったので、ちょっとドキドキしました。
感想などいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900o/>

バルト海の花盗王子

2010年11月24日16時01分発行